NOVEL
writing pen

デートの始まりとして、女は好んでオープン・カフェを選んだ。秋も深くなってきたこの季節などは外の席に空きが多く、人目を気にせず恋人との時間を楽しめるからだ。
彼の紙が木枯らしに数ページめくられたが、次の風で同じ分だけ戻ってきた。
「やっぱりアラフォーともなるとキツイわね、寒さがこたえるもの。チャールズ、あなたは大丈夫かしら」
恋人に微笑をやりつつ、女はカプチーノを口に含んだ。もうすっかり冷めている。
「いってるじゃないか、エミ。ボクのことはチャックって呼んでくれよ。つき合い始めてもう二ヶ月なんだ。他人行儀はなしさ」
ページの角をペラペラと風にまかせるさまは、だだをこねる少年のようだ。
「あたしったら、ゴメンナサイ」
舌先をのぞかせ、女は恋人を持ち上げて胸に押しあてると、そっと口づけをした。表紙には、『チャールズ・英和辞典』と書かれている。
「いやだ、もう始まっちゃう」
腕時計を見やり、女があわてて席を立つ。
「そんなに焦る必要はないさ、エミ。映画なんて最後の二十分だけが映画なんだから」
自分はそうは思わないと笑い、女が恋人を胸にかき抱いたまま席を離れていく。首をかしげた店員が、ガラス越しに彼女を見送っていた。
映画のあと、ふたりはデパートを巡った。

「あなたのような地味な人には、意外とパステルカラーなんかが似合ったりするのよ」
　紳士服売り場で、女が辞書にマフラーを巻きつけて矯めつ眇めつしている。手袋をあてる、帽子をかぶらせる。
　怪訝な顔で近づいていく女店員を気にする様子もなく、
「どれもピンとこないわね、別の店ものぞいてみましょう」
　商品を棚に返すと、女は胸もとにささやきかけながら売り場をあとにするのであった。
　そのイタリア料理店でアルバイトしている女子学生は、窓際に座っている客が気になってしょうがなかった。中年の女がカルボナーラを食べているのだが、差し向かいの空席に、先ほどからぶつぶつと話しかけているからだ。分厚い本が立てられ、その前で手つかずのイカスミスパゲティが湯気をのぼらせている。
「あの俳優ったら――次の映画は――」
　そんな言葉が断片的に届いてくる。
　ごくりと唾を呑み込む女子学生であったが、ひとりでしゃべり続けている女の笑顔はつくったものではないと思った。
　女がラブホテルのカウンターでもめている。
「ですから、ウチはダメなんすよ。ひとりの客はお断りしてるんです」
　目の据わった男性従業員だ。
「ひとりですって？　あなた、どこに目をつけていて。わたしのどこがひとりなのよっ」
　十分間の悶着のあと、今回だけという条件つきで、女は入室を許された。
「そんな、チャックったら！」
　その夜は、辞書が天井にぶつかるほどであった。

　彼女にとってそれからの半年は、温かさと幸せに満ちたものであったが、
「エミ、キミにいつまでも縛られているボクはボクじゃないってことに気がついたんだ。毎日、息が詰まる思いなんだ。別れてほしい――」
　そんな日が突然やってきた。
「あなたもそうなのね、チャック・・・・・・」
　以来、女の姿を見た者は誰もいなかった。（了）